2025年9月7日聖霊降臨後第13主日説教

申命記30章15-20節

フィレモンへの手紙1-20節

ルカによる福音書第14章25-33節

本日の旧約日課「申命記」は、モーセが出エジプトの出来事を振り返りながら、イスラエルの人々に様々なことを教えた部分（1：6-30：20）の最後です。31章からは、新しい指導者ヨシュアの選出のお話となり、出エジプトの出来事は新しい段階へと移ります。

出エジプトの出来事の申命記的まとめといえる本日の箇所は、『聖書』の小見出しに「命と幸い、死と災い」とある通り、「見よ、私は今日、あなたの前に**命と幸い、死と災いを置く**」（申30：15）と、二つの道を提示することから始まります。「命と幸い」の道に至るには、「**私が今日あなたに命じているとおりに、あなたの神、主を愛し、その道を歩み、その戒めと掟と法を守りなさい**」（申30：16）と求められます。主なる神様を信じます、愛しますという言葉だけではなく、律法と戒めを守ることが求められるのです。「死と災い」の道に陥るのは、「**心変わりして聞き従わず、惑わされ、他の神々にひれ伏し、仕える**」場合です。どちらを選んでもよいということではなく、イスラエルの人々に対して、そして、今『聖書』を読んでいる人に対しても、「命と幸い」に至る道を選びなさいと命じているのです。

二つの道の提示という始まりは、『聖書（新約）』と同時期に書かれた初代教会の「**ディダケー**」という文書を想起させます。その冒頭は、「二つの道がある。一つは命の（道）、一つは死の（道）、二つの道の間の違いは大きい（私訳）」（1：1）と始まります。「**ディダケー**」は、『聖書』には属していませんが、イエス様の教えを継承した初代教会の文書です。申命記の本日の箇所、そして「**ディダケー**」の冒頭、信仰者にとって大切な事柄を、対照的な二つの項目の提示によって最初に示すという意味では、これら二つは、極めて類似しているといえます。しかし、この二つには違いもあります。

「申命記」は、先ほど触れた通り、二つの事柄の提示ののち、主なる神様を愛し、そして、律法と戒めを守ることを求めます。しかし、「**ディダケー**」は、二つの事柄（道）の提示の後、「**まず、命の道はこれです。第一に、あなたを造られた神を愛しなさい。第二に、隣人を自分自身のように（愛しなさい）**」（1：2-3）と続くのです。この部分は、マルコ福音書というよりもマタイ福音書にあるイエス様の教えを継承しているといえます（マタイ22：37-39）。「**ディダケー**」に示される教会の教えは、第二の事柄として、律法と戒めを守るのではなく、隣人を愛することを提示しているのです。もちろん、ユダヤ教の教えにおいても、神を愛することと、隣人を愛することは、律法全体を集約する大切なこととして教えられていましたので、その意味では同じです。それでは違いはなんでしょうか。一般的には、隣人に対する理解が、イスラエル（申命記）と教会（イエス様）とで違うといわれます。イスラエルが狭い概念（イスラエル内のみ）と

してとらえ、教会が広い概念（教会外世間一般も含む）としてとらえているということです。しかし、『聖書』の様々な内容や、歴史的な事柄を振り返ると、必ずしもそうとは限りません。違うのは、第一の主なる神様への愛、それに続く第二の事柄、そこに何を本質として置くかということです。

申命記は、律法と戒めを守るという大きな概念があって、その代表として、一般的に隣人を愛することが尊重されているといえます。主なる神様を愛することの次に来る第二の事柄の本質は、律法を守ることにほかなりません。それが神様の愛に応える方法であるからです。「ディダケー」が示す教会の教えは、主なる神様を愛することの具体的な現れとして、隣人愛が置かれているのです。これは、律法を対象化して守るのではなく、イエス様が示された愛に基づいて、自発的に律法を実践することを求めています。それはパウロの姿とも同じです。そして、その具体例が、本日の使徒書のフィレモンへの手紙です。

フィレモンへの手紙は、非常に短い手紙ですが、パウロ自身が書いた手紙です。パウロは、牢獄で知り合った奴隷オネシモについて、オネシモの主人であるフィレモンに「**もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、愛する兄弟として**」接してほしいと願っているのです。ローマ市民であるパウロは、ローマ帝国の奴隷制度に明確に反対であったかどうかはわかりません。第一コリントでは、キリスト者になったとしても、奴隷は奴隷のままでいなさいとも語っています（1コリ7:21）。しかし、オネシモに関してはこの手紙を書いて、教会の交わりの中では、主なる神様を愛するがゆえに、オネシモを奴隷以上の者、愛する兄弟として接してほしいと願っているのです。隣人を愛すること、それはまず教会の交わりから始まらなければならないことを示しているのです。

本日の福音書のお話で、イエス様は一つの歩みを提示しています。それは、付き従ってくる群衆に対して語った言葉、「**誰でも、私のもとに来ていながら、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命さえも憎まない者があれば、その人は私の弟子ではありえない。自分の十字架を負って、私に付いて来る者でなければ、私の弟子ではありえない**」（ルカ14:26-27）です。非常に衝撃的な言葉です。しかし、求めていることは、理由もなく何かを憎めということではなく、愛することが前提となっている事柄（親類そして自分の命）を超えて、何かを愛する覚悟があるかということです。そして、それがまた自分の十字架を負うことであり、イエス様に従うことであるからです。

パウロがフィレモンに願った事柄は、きわめて個人的でありまた小さいものでした。しかし、当時の常識を超えた事柄でした。小さいけれども、それを見過ごしては、主なる神様を愛したことにならない事柄でした。ローマ帝国時代よりも複雑化した現代社会にある教会にとって、隣人愛の対象として考えなければならない事柄は、数多くあります。しかし、教会は、パウロが願ったような最初の課題もまだ達成していないのが現状です。ここでは具体的に示しませんが、教会が大切な事柄だと教えながらも、教会自身が実践できていない隣人愛は数多くあるのです。社会の事柄に関心を持つことは大切です。だからこそ、教会の中でこそパウロのように、たとえ小さく事柄であっても、主なる神様の愛が光るような隣人愛を実践していきたいと思えます。